

北欧の人々と海

MESSAGE



村井誠人

MURAI Makoto

プロフィール

1947年東京都生まれ。津田塾大学・大阪外国語大学・東京大学非常勤講師を兼務し、2000-01年にコペンハーゲン大学客員教授としてデンマークに滞在。早稲田大学文学学術院教授。北欧史専攻。主な編著書に、『読んで旅する世界の歴史と文化 北欧』（共編、新潮社、1996年）、『新版 世界各国史21 北欧史』（共編、山川出版社、1998年）、『ノルウェーの社会』（早稲田大学出版部、2004年）、『スウェーデンを知るための60章』（明石書店、2009年）、『デンマークを知るための68章』（明石書店、2009年）などあり。

北欧が話題とされるとき、氷河時代に形成された厳しい自然の中での、それに対する人々の冒険に富んだ勇敢な営みが語られることが多い。そして、北欧の人々の果敢な冒険心の源としてヴァイキングの歴史へと遡って、語られていくというステレオタイプが存在する。

ヴァイキングという語の説得力のある語源の一つに、「不在」とか「故郷に居ない者（不在者）」すなわち、（季節の良い夏に）船に乗って故郷を後にし、外の世界で（交易やら、相手が弱ければ強奪までの某かのことをして）稼いで、帰ってくる者、というものがあり、私たちが出会うスカンディナヴィア系の北欧人の祖先は、まさに男ならヴァイキングであったということが出来る。私たちが「サムライ」を勇敢な先祖としてあげても、その存在は江戸時代にあっては人口の1/10にしかすぎないわけで、ヴァイキングを先祖とする彼らには、はるかに及ばないのである。アルコールに強いデンマーク人の女性に、「強いね」といって返ってくる答えは、「ヴァイキングの末裔だもの!」は、決して珍しくはない。

さて、ここにデンマークのユトランド半島北部の人々がよく唄う歌がある。「風は強くリーム・フィオーアの水面を越えて」という題がつけられている。リーム・フィオーアと呼ば

れる「フィヨルド（長湾）」が、その幅の狭い水面でカテガト海峡から北海へと半島を横切り、半島の一番北側の地を、結果として「島」としてしまっている水域を舞台に、そこで暮らす人々の歌である。デンマークの「フィオーア（フィヨルド）」は、断崖を形成する氷蝕地形を指すのではなく、主に氷床（氷原）の下を流れていった融水の流路がその原型である。氷床が運んできた土塊からなる低平な地形に、氷河時代の終了とともに深く入り込む細長い湾が形成され、それを指してそう呼ぶ。その地に住む、農民であり、船乗りである人々の心である。その三番・四番は以下のごとくである。

リーム・フィオーアの水面に陽は射し、
その陽光は輝き、向こう見ずの人間の営みをあざ笑う。
寄せる波は燃え盛る炎の
ヴァイキングたちの夢を誘った白い火を投げかける。
そして、若者たちはフィオーア（フィヨルド）の持つ
力を感じる、
—— 広く開かれた世界への憧れを。

リーム・フィオーアの水面に、憧れは閉じ込められた。
ここでわが頬は航海への熱き思いに火照ったものの、
冷たい飛沫がわが額にかかり、
航海への憧れは、船に揺れる不安な心に届する。
そうか、リーム・フィオーアよ。お前の青黒き不機嫌
さを愛そう、
（東の）ハルスから（西の）ハーボウア間の強風のも
とで。

世界の大洋を駆け巡る夢を雄々しく唄う舟歌が、ユトランド西海岸を吹き抜ける強風にあおられた波の飛沫がおでこにかかった途端に、現実に戻り、フィオーア内の往還に自らを慰めるところに、この歌の面白さがあり、「板子一枚下は、地獄」を知る人々の実感である。アイスランドに残された散文物語であるアイスランド・サガを読む人々から、よく言われるのだが、サガには、北欧の人々がいかに海の怖さを知っていたかが書かれており、海が彼らにとってロマンチックな対象とはならなかったという。実際、我々は砂漠を知らないからこそ、ロマンチックな「月の砂漠」を誦い、また、民族的には「平原の民」であるポーランド人が、海に関するロマンチックな詩を詠んだのに出くわすのである。

実際、北欧の人々が海とのかかわりの中で生活していることは否めず、例えばノルウェー国民の3/4は、海岸線から15km以内に居住している。北欧の人々を海に誘ったものは、元来は「静かな海」の存在であり、外洋から港まで長い水道を進んでようやく到達するバルト海内の多くの港、フィヨルドや島影に抱かれた港、そして今でも北欧各国の主要都市への互いの交通手段が、船舶によることが決して例外ではないことも、歴史が展開した舞台を理解する手助けとなる。また、かつて、フィンランドからやってきた留学生が、九十九里浜に押し寄せる波を見て、故国では存在しないものを見たと言って、興奮げに話していたことも、いま思ひだす。

ストックホルム近海（写真：遠藤徹也）